５－０３	様式３

主題	従来型施設でのユニットケアでリスクマネジメント力を高める
副題	窮屈な生活とルーティーン業務からの解放を目指して

リスクマネジメント	ユニットケア	研究期間	８か月

事業所	（福）ウエルガーデン　ウエルガーデン伊興園（介護老人福祉施設）
発表者：松本嗣未（まつもとつぐみ）安部昭宏	アドバイザー：杉本浩司（すぎもとこうじ）
共同研究者：	

電　話	03-5838-1500	E-mail	wg-ikoen@welgarden.or.jp
ＦＡＸ	03-5838-1501	ＵＲＬ	http://welgarden.or.jp/ikoen/

今回発表の事業所やサービスの紹介	ウエルガーデン伊興園は西竹ノ塚に東武スカイツリーラインの竹ノ塚駅が所在し、平成２０年には日暮里舎人ライナーが開業し伊興地区から徒歩利用可能圏内となりました。平成１３年に開設した従来型特養です。特養１３０名・短期２６名、通所介護（認知症含む）、訪問介護、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターが併設している施設です。

《１．研究前の状況と課題》

１つの食堂空間に全利用者が集まっており、職員も自然と食堂の空間のみでの見守りしか行えていなかった。食堂の反対側にあるデイルーム付近の見守りや、居室で過ごされている利用者の対応、利用者の所在確認が十分に行えない状況であった。また、時間で介助内容が区切られており、常に職員が時間に追われ１つ１つの介助が流れ作業でしか行えず、利用者の負担やストレスを与えてしまう環境でもあった。感染症発生時はフロア全体に蔓延してしまう危険性を考慮し、全居室対応による利用者のストレスと不安が課題であった。

《２．研究の目標と期待する成果・目的》

当施設では「生活を止めないケアの実践」に取り組み、「当たり前の生活を取り戻す」ためのケアを提供している。本研究の目的はリスクマネジメント力を高め、心身ともに職員が余裕をもってケアをできる職場環境をつくるとする。

目の行き届く職員の配置付けをし、介助人数を半分にする事により、職員の業務負担軽減から、自立支援への取り組みを展開する。自立支援では水分摂取量維持による日中覚醒を促し、食事形態改善と栄養量アップ・トイレでの排泄・機械を使用しない家庭に最も近い個室浴での入浴・フロア内での歩行等、利用者個々の個別ケアによる健康維持、増進に期待する。また、感染症発生時に蔓延を最小限に食い止める。

安全・安心を確保したうえで当たり前の生活に近づけることに期待して、改善点を１つ１つ上げながら取り組んだ。

《3．具体的な取り組みの内容》

１フロア54名を１つの空間（食堂）で見守りを行っていたが、フロア内に間仕切りを設置し、１フロア２ユニットに移行した。１ユニット27名ずつで生活をはじめた。今までデイルームとして使用していたスペースにキッチンを設置。２ユニットに分けることにより職員の配置も日々フロア全体を把握できる様バランスを考え業務にあたっている。

【リスクマネジメント力を高める】

①多人数集団での生活の窮屈さからの解放

②職員１人に対する業務負担軽減、動線の短縮

③流れ作業的ケアから脱却し、基本ケアの徹底と自立支援で体調不良者・入院者を減らす

④利用者の細やかな見守り

⑤感染症蔓延防止（迅速かつ最小限に対応できるよう、感染症セットやマニュアルを作成し、掲示する）。

《4．取り組みの結果と考察》

①ある程度の生活の窮屈さから解放できた

②職員１人に対しての見守りの範囲が狭まり、業務負担軽減と動線の短縮ができている。

③基本ケアの徹底で覚醒水準が上がり、食事形態を改善できた利用者も増えた。生活リハビリの実施により座位・立位が安定した方が増え、オムツからトイレへ無理なく移行できている。ターミナルケア・新規入居利用者も多く、全体の水分摂取量・栄養量は維持にとどまっているが、個々の水分摂取量・栄養量は増えており、体調不良者・入院者も以前に比べ著しく減っている。

全体	水分摂取量（ml）	栄養摂取量（kcal）	入院日数（日）
3月	１，２９９	１，３０１	８９
4月	１，２７２	１，２５６	７８
5月	１，２８３	１，２３６	２０
6月	１，３７１	１，２６３	１９

④細やかな見守りができ、利用者の変化の早期発見や所在確認等につながっている。

⑤取り組み後の感染症発生はない。

利用者の意向に沿って買い物・外出・外食等実施し、当たり前の生活を目指している。また、職員に余裕が生まれ、利用者への落ち着いた対応ができ双方ともに良い環境となっている。

《5．まとめ、結論》

時間に追われるケアからの脱却で心身ともに職員は余裕をもってケアできるようになった。リスクマネジメント力も高まってきている。

職員に余裕ができたことで、時間で区切っていた介助内容を見直し、そのときのニーズに合わせたケア提供ができるようになった。今まで気づくことができなかった「生活の窮屈さ」に気づくことができ、そこから発生する様々なリスクを回避できた。利用者の当たり前の生活を常に目指すのが介護者として求められる。水分摂取量が上がった、トイレ誘導率が上がったという結果で満足してはいけない。いかに利用者のニーズに寄り添い、安心・安全を確保できるか。今後はユニットケアになったからこそできるリスクマネジメントを日々模索し業務を行っていきたい。

《6．倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

「ユニットケア個性化大作戦」

筒井書房　　著　坂本宗久

「介護の生理学」

秀和システム　　著　竹内孝仁　他

《8．提案と発信》

介護者とは、自立した日常生活を営める様になる為の支援を行うものであり、年々高齢者が増加する中、施設に入るのが最終目的ではなく、施設でもう一度当たり前の生活に戻ってもらい、在宅復帰を最終目標とし、利用者の生活を止めない支援をしていきたい。

【メモ欄】